

NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン

10

October, 2025



11

November, 2025



2025/2026 シーズン

新日本フィルハーモニー交響楽団 10、11月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #666 相場ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #34 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ⑤① 田島小春 (ホルン)	13
NJP from Inside	14
NJP 1月、2月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	17
2025/2026シーズン 定期演奏会プログラム	18
記者会見レポート 柴田克彦	21
お客様からの声	23
室内楽シリーズ	27
「パトロネージュ・システム」のご案内	30

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season

#666

10.11 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第666回定期演奏会
2025年10月11日(土)14時00分
すみだトリフォニーホール

10.13 [月・祝]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第666回定期演奏会
2025年10月13日(月・祝)14時00分
サントリーホール

◎フィリップ・グラス (1937-)

ヴァイオリン協奏曲第2番「アメリカン・フォー・シーズンズ」*

約40分

Philip Glass: Violin Concerto No.2 "The American Four Seasons" *

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. Prologue | 5. Song No.2 |
| 2. Movement I | 6. Movement III |
| 3. Song No.1 | 7. Song No.3 |
| 4. Movement II | 8. Movement IV |

—— 休憩20分 ——

◎ストラヴィンスキー (1882-1971)

バレエ音楽『火の鳥』組曲 (1945年版)

約30分

Igor Stravinsky: The Firebird Suite (1945 version)

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. Introduction | 7. Scherzo (Dance of the Princesses) |
| 2. Prelude and Dance of the Firebird | 8. Pantomime III |
| 3. Variations (Firebird) | 9. Rondo (Chorovod) |
| 4. Pantomime I | 10. Infernal Dance |
| 5. Pas de deux (Firebird and Ivan Tsarevitch) | 11. Lullaby (Firebird) |
| 6. Pantomime II | 12. Final Hymn |

[指揮] 久石 譲

Joe Hisaishi, Conductor

[ヴァイオリン] ロバート・マクダフィー *

Robert McDuffie, Violin *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団) [10/11公演]
- 特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援：アメリカ合衆国大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。

<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどで
ご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©Nick Rutter

久石 譲 [指揮] Joe Hisaishi, Conductor

現代音楽の作曲家として活動を始め、音楽大学卒業後からミニマル・ミュージックに興味を持つ。

2004年「新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ」の音楽監督に就任。14年より最先端の“現代の音楽”を紹介する「MUSIC FUTURE」を主宰、19年には「FUTURE ORCHESTRA CLASSICS」を開始するなど、多岐にわたる取り組みを展開している。

23年、ドイツ・グラモフォンからリリースされた『A Symphonic Celebration』が米国ビルボード2部門で1位獲得。24年11月、LAフィルなど4団体の共同委嘱によるハーブ・コンチェルトを発表。世界ツアー「Joe Hisaishi Symphonic Concert: Music from the Studio Ghibli Films of Hayao Miyazaki」は各地で大成功を収め、25年7月、ツアーファイナル公演を東京ドームで開催。25年8月、ロイヤル・フィルを指揮し、BBCプロムスにデビューした。

ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団 Composer-in-Association。
25年4月より日本センチュリー交響楽団音楽監督。

ロバート・マクダフィー [ヴァイオリン]

Robert McDuffie, Violin



イタリア・ローマ室内楽音楽祭およびマーサー大学のロバート・マクダフィー・センターの創設者でもある、エミー賞受賞のヴァイオリニスト、ロバート・マクダフィーは、エネルギッシュで幅広い活動を行っている。世界各地の一流オーケストラとソリストとして共演し、R.E.M. (米国オルタナティヴ・ロックバンド) のベーシストであるマイク・ミルズや、ローリング・ストーンズのピアニスト、チャック・リーヴェルなど、多彩な音楽家との共演も行っている。フィリップ・グラスは、彼に捧げる作品としてヴァイオリン協奏曲第2番「アメリカン・フォー・シーズンズ」を作曲し、マイク・ミルズは「ヴァイオリン、ロックバンド、オーケストラのための協奏曲」を彼のために作曲した。最近では、チェコ・ナショナル響と共にアメリカ各地をツアーし、カーネギーホールでのブラームス「ヴァイオリン協奏曲」の演奏は高い評価を受けた。今後の活動としては、2026年にグラスの90歳の誕生日を記念して、グラス「ヴァイオリン協奏曲第1番」をフィルハーモニー・ド・パリとミラノ・オーデトリウムで演奏し、27年1月にはカーネギーホールでも演奏する予定である。使用楽器は1735年製ガッルネリ・デル・ジェスの「ラーデンプルク」。

オフィシャルサイト: www.robertmcduffie.com

Program Notes ●相場ひろ [音楽評論]

「四季」といえば、アントニオ・ヴィヴァルディ(1678~1741)の世界的な人気作品で、協奏曲集 op. 8の冒頭を飾る連作である。このop. 8のタイトル“Cimento dell'armonia e dell'invenzione”は日本語では慣例として「和声と創意の試み」と訳されるが、イタリア語の原題をいくつかの言語に訳したものと見ると、「和声と創意の『冒険』『挑戦』『競い合い』『争い』」といったニュアンスのものが多い。ここでいう「和声」とは既存の音楽理論全般を指すというのが一般的な解釈で、つまりこの曲集のタイトルには「既存の音楽理論と新しい創意のせめぎ合い」「伝統に対する革新の挑戦」といった意味が込められているのだ。協奏曲という当時既に確立したフォーマットに、季節ごとの情景を描いた詩を結びつけようとした「四季」は、当時からすればまさに「挑戦」と呼ぶにふさわしい作品だったに違いない。

現代では、さまざまな作曲家がヴィヴァルディの「四季」へのオマージュとして、またその再創造として、「四季」をテーマとする音楽を作曲してきた。なかでも有名なのは、ヴィヴァルディの楽曲から全体の75パーセントに及ぶ素材を借用したというマックス・リヒター(1966~)の「ヴィヴァルディの四季 — リコンポーゼド」(2012)だろう。素材を自由に料理して環境音楽風に仕上げたそちらも「四季」に対するひとつの「挑戦」であった。他方、フィリップ・グラスは異なる道を歩んだ。バロック音楽のフォーマットを彼なりに再解釈した上で、季節と各楽曲の対応を敢えて明示しないことで、音楽の喚起力と聴き手の想像力のせめぎ合いの場として、「四季」の投げかけた「創意」そのもののありようを問いかける意欲作を創り上げたのだ。その音楽に、聴き手の方々は何を、どのように聴きとられることだろうか。

■ フィリップ・グラス：

ヴァイオリン協奏曲第2番「アメリカン・フォー・シーズンズ」

マクダフィーの委嘱で誕生 ▶

アメリカのヴァイオリン奏者ロバート・マクダフィーは、フィリップ・グラス(1937年生)が1987年に完成させたヴァイオリン協奏曲第1番に深い感銘を受け、2002年にグラスに対して新作の協奏曲を委嘱した。しかし当時グラスは多忙であり、ようやく作曲に取りかかれたのは09年夏のことであった。この新作はアントニオ・ヴィヴァルディの人気作品であるヴァイオリン協奏曲集「四季」と並べて演奏することを前提として委

囁かれたので、編成もヴァイオリン独奏と弦合奏、そして鍵盤楽器としてシンセサイザーを伴うという小ぶりなものとなっている。完成された作品は09年12月9日、カナダのトロントにおいて、マクダフィーの独奏、ピーター・ウンジャン指揮トロント交響樂團によって行われた。

聴き手に託された解釈 ▶

ヴィヴァルディの「四季」では、各曲がひとつの季節を主題とし、楽譜に添えられたソネット(14行詩)の内容を反映する、一種標題的な進行をするのにならって、グラスは当初、各楽章をアレン・ギンズバーグの詩と関連させようと考えたが、最終的にそのプランは放棄された。さらに全曲の完成後、全4楽章がそれぞれどの季節を想起させるのかについてグラスとマクダフィーとの間で感じ方の相違があったことを契機に、敢えて各楽章と季節の対応を明記せず、聴き手が自由に解釈できるようにした。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

全曲は無伴奏ヴァイオリン独奏による「プロローグ」に始まり、各楽章間には「ソング」と題された無伴奏のエピソードが挿入される。グラスはこれらのエピソードのみを連続して演奏することで、ひとつの無伴奏ヴァイオリン作品を構成するようにとも意図している。それら無伴奏のエピソードも含めて、各部の調的な連結は伝統的かつシンプルなものとする半面、バロック音楽に典型的な楽器間の対位法的な絡み合いは抑制されていて、楽句の反復を基礎に置くグラスのスタイルと併せて、独自のサウンドを形成するのに貢献している。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、シンセサイザー、弦楽5部。

■ ストラヴィンスキー：バレエ音楽「火の鳥」組曲 (1945年版)

ディアギレフに抜擢され ▶

1909年5月、ロシア人興行師のセルゲイ・ディアギレフは、一流の踊り手や振付師、舞台美術家を揃えたロシア・バレエ団を率いて第1回パリ公演を行い、「牧神の午後」をはじめとする今や伝説的な舞台によって大成功を収めた。しかしその際に批評家たちからの反応として「もっとロシアらしい演目が聴きたい」という意見があり、ディアギレフはこれに応えるかたちで、次のシーズンにはロシア的な題材による新作を舞台にかけることを企画した。ロシア民話に基づく『火の鳥』の台本を振付師のミハイル・フォーキンにまとめさせると、彼はいく人かのロシア人作曲家に打診した後、管弦楽曲「幻想的スケルツォ」や「花火」によって注目を

浴びていた新進作曲家のイーゴリ・ストラヴィンスキー (1882~1971) に白羽の矢を立てた。ストラヴィンスキーの音楽によるバレエ『火の鳥』は1910年6月に舞台にかけられて、たいへんな評判を呼んだのであった。

3種の組曲 ▶

全曲で50分近くかかる『火の鳥』について、ストラヴィンスキーは都合3度演奏会用組曲を作成した。1911年版は全曲版の4管編成のままに数曲を省略し、「魔王カステイ一味の凶悪な踊り」で終わる。1919年版は演奏会で採り上げやすいように管弦楽を2管編成に縮小している。1945年版は1919年版の編成をほぼ踏襲しつつ曲数を増やし、かつオーケストレーションについていくつかの変更も行っている。なお、1945年版のもっとも特徴的な箇所として、終曲における金管のファンファーレが歯切れのよいスタッカートで奏される場面がよく挙げられるが、これは1928年に収録されたストラヴィンスキー自身の指揮による抜粋録音(1911年、19年版組曲より)で既に導入されていたものである。

1945年版(計12曲)の構成 ▶

バレエは深い森の闇を思わせる序奏(1)で幕を開ける。王子イワンがとある庭園に足を踏み入れると、目の前に美しい火の鳥が現れる(2)。王子がその後を追うと、火の鳥はあちこちへと跳躍しながら逃げ回るものの(3)、ついには王子に捕らえられる(4)。火の鳥は彼に命乞いをし、彼の身が危ういときには助けに来ることを約束して、ようやく放してもらう(5)。火の鳥が立ち去ると、庭園に13人の王女がやってくる(6)。彼女らは魔法によって魔王カステイに幽閉されているのだ。王女たちが金のリングを手で遊んでいるところ(7)に、イワンが姿をあらわす(8)。王女たちは美しい旋律にのって、ロンド(ロシア語で「コロヴォード」)を踊る(9)。やがて夜が明け、イワンはカステイの操る怪物たちに捕まってしまうが、火の鳥の魔法によって怪物たちは激しく踊り出し、カステイも加わって荒れ狂う(10)。崩れ落ちるようにして彼らの踊りが終わると、音楽は火の鳥の歌う子守歌に変わり、カステイたちは眠りに落ちる(11)。やがて魔王は目覚めるが、たちまちに命を落とす。カステイの宮殿も魔法も消え去り、石にされていた騎士たちが目覚める(12)。角笛が歌い上げる荘重な旋律が合図となって、物語は輝かしいフィナーレを迎える。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、吊しシンバル、トライアングル、タンバリン、シロフォン、ハープ、ピアノ、弦楽5部。

11.7 [金] 8 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第34回

2025年11月7日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

11月8日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●チャイコフスキー (1840-93)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op. 35 *

約35分

Pyotr Il'yich Tchaikovsky: Violin Concerto in D major, op. 35 *

I. Allegro moderato - Moderato assai

II. Canzonetta: Andante

III. Finale: Allegro vivacissimo

—— 休憩20分 ——

●シベリウス (1865-1957)

交響詩「フィンランディア」op. 26

約10分

Jean Sibelius: Finlandia, op. 26

●シベリウス

交響曲第5番 変ホ長調 op. 82

約35分

Jean Sibelius: Symphony No. 5 in E-flat major, op. 82

I. Tempo molto moderato

II. Andante mosso, quasi allegretto

III. Allegro molto

[指揮] 藤岡幸夫

Sachio Fujioka, Conductor

[ヴァイオリン] 神尾真由子 *

Mayuko Kamio, Violin *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmasters

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

■後援：フィンランド大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



Embassy of Finland
Tokyo

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころさしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

鹿島特設サイト



100年をつくる会社
鹿島

Profile



©Shin Yamagishi

藤岡幸夫 [指揮] Sachio Fujioka, Conductor

日本指揮者界の重鎮であった渡邊暁雄最後の愛弟子、サー・ゲオルグ・ショルティのアシスタントも務めた。英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒業。1992年最も才能あるEU加盟国の若手指揮者に贈られるサー・チャールズ・グローヴス記念奨学賞を特例で受賞。94年ロンドン「プロムス」にBBCフィルを指揮してデビュー以降数多くの海外オーケストラに客演。オペラでもスペイン国立オヴィエド歌劇場等で脚光を浴び、2024年11月フォーレ没後100年の命日にはパリのマドレーヌ寺院でレクイエムを指揮する栄誉を担った。首席指揮者として毎年40公演以上に共演し2026年に27シーズン目を迎える関西フィルとの一体感溢れる演奏は高い評価を得、4月からは総監督として更なる重責も担う。また19年の首席客演指揮者就任直後から展開している東京シティ・フィルとの特徴ある活動は毎回大きな注目を集めている。英シャンドスからBBCフィルとのCD8枚、ALM RECORDSから関西フィルとのシベリウス交響曲全集をリリース。著書に『音楽はお好きですか?』『続・音楽はお好きですか?』(敬文舎刊)。メディアへの出演も多く、番組の立ち上げに参画し指揮・司会として関西フィルと共に出演中のBSテレ東「エンター・ザ・ミュージック」(毎週土曜朝8:30・BSテレ東公式YouTubeでアーカイブ配信中)は2025年10月で12年目、放送600回に迫る人気番組。2002年渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。公式ファンサイト <http://www.fujioka-sachio.com/>



©Makoto Kamiya

神尾真由子 [ヴァイオリン] Mayuko Kamio, Violin

4歳よりヴァイオリンを始める。2007年に第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた。ニューヨーク・タイムズ紙でも「聴く者を魅了する若手演奏家」「輝くばかりの才能」と絶賛される。国内の主要オーケストラはもとより、チューリッヒ・トーンハレ管、BBC響、ミュンヘン・フィル、イスラエル・フィル、バイエルン州立歌劇場管、ワルシャワ国立フィルなどと共演している。指揮者では、デトワ、ロストロポーヴィチ、スピヴァコフ、アシュケナージ、ピエロフラーヴェクなどと共演。20年10月『J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ』の新譜を発表。BSテレ東「エンター・ザ・ミュージック」における「マユコ先生のヴァイオリン・レッスン!」では、第一線で活躍するヴァイオリニストでありながら指導者としての顔も各方面より認められている。これまで里屋智佳子、小栗まち絵、工藤千博、原田幸一郎、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫、ザハール・ブロン各氏に師事。大阪府知事賞、京都府知事賞、第13回出光音楽賞、文化庁長官表彰、ホテルオークラ音楽賞はじめ数々の賞を受賞。楽器は宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1731年製作「Rubinoff」を使用している。東京音楽大学教授。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

ジャン・シベリウス(1865~1957)にとって、ロシアのピョートル・チャイコフスキー(1840~93)はアンビバレントな(=相反する)感情を抱かざるを得ない作曲家だった。留学先のドイツとは異なる価値観に目を見開かせてくれたと同時に、ロシア音楽の垂流に位置づけられてしまう要因になってしまったからだ。もっと具体的にいえば、チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」はシベリウスの交響曲第1番を作曲するうえでモデルとなったのだが、シベリウスが「チャイコフスキーの悲愴交響曲のフィンランド方言」と貶される要因も作ってしまったのである。

またロシアは19世紀初頭から母国フィンランドを支配し続ける存在であった。圧政に抗おうとしたフィンランド人たちを熱狂させたのが、本日も演奏される「フィンランド」であったことは広く知られている。だが、その原曲「フィンランドは目覚める」は劇の伴奏音楽(劇伴)で、劇中ではロシア皇帝アレクサンドル2世(1818~81)もフィンランド国民のアイデンティティ確立に貢献した人物として取り上げられていたのである(スウェーデンに支配されていた時代にはなかった自治権を与えたためと考えられる)。シベリウスとロシア文化の関係は一筋縄では行かないのだ。

■ チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 35

弟子コーテクの存在
～作曲の経緯

1877年1月、若い男性ヴァイオリニストのヨシフ・コーテクを愛してしまったチャイコフスキーは、自らの同性愛を否定したかったのか、同年7月に元弟子のアントニーナ・ミリュコヴァの求愛に応じて結婚。ところが3週間足らずで別居してしまう。傷心のチャイコフスキーだったが翌年にコーテクと再会。彼が持っていたフランスの作曲家エドゥアール・ラロの「スペイン交響曲」に魅せられたチャイコフスキーが作曲しはじめたのが、このヴァイオリン協奏曲だ。当然のようにコーテクに助言を求め、彼の反応がよくなかったため第2楽章は全面的に書き直している。ところが彼に初演を依頼することになれば、作品を献呈することもしなかった。やはり秘密の恋を周囲に悟られたくなかったのだろうか?

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 短い序奏のあとに続いて、独奏ヴァイオリンが奏でる明るく伸びやかな第1主題、もう少し切なげな第2主題が軸になって構成されたソナタ形式。第1主題が管弦楽によって高らかに奏でられるところから展開部に入り、再現部の前には独奏ヴァイオリンが無伴奏で弾くカデンツァが置かれている。

第2楽章「カンツォネッタ(小さな歌)」 三部形式で、ロシアの寒々とした気候を想起させるメロディと、暖を取っているかのような温かみのある音楽が対比される。

第3楽章 前楽章の終わりでロンドの主題が予兆された後、和音が爆発すると切れ目なく第3楽章が開始。ウクライナとロシアの急速な舞曲であるトレパークのような音楽が何度も登場するが、そのあいだに抒情的な旋律が挟み込まれていく。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ シベリウス: 交響詩「フィンランディア」op. 26

歴史劇の1曲から ▶ 1899年11月、フィンランドの首都ヘルシンキにおいて歴史劇「古代史にもとづく6つの絵画」が新聞社主催で上演された。表向きはジャーナリストの年金資金調達を謳っていたが、真の目的は帝政ロシアに抵抗して報道の自由を守ろうとする報道機関への応援であったらしい。この演劇のためにシベリウスが書き下ろした音楽から第6曲「フィンランドは目覚める」を独立させ、主にクライマックスを改訂したのが交響詩「フィンランディア」(1900)である。

音楽の特徴 ▶ 他国の圧政に苦しむフィンランド国民を想起させる重苦しい導入部ではじまり、そこから徐々に独立にむけた機運を高めていくと、テンポの速い主部に入っていく。勇ましい音楽のあいだには、讃美歌のような穏やかな旋律が挟み込まれるが、これは後に「おお、フィンランド、見よ、夜の脅威は追い払われ、汝の日がやってくる」という歌詞で歌われる「フィンランディア讃歌」となる。フィンランドでは第二の国歌のように愛唱されているメロディだ。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部。

■ シベリウス: 交響曲第5番 変ホ長調 op. 82

開戦の報を聞いて ▶ 「フィンランディア」から14年後、1914年7月28日に第一次世界大戦が勃発する。開戦の翌日に作曲されはじめたのが交響曲第5番だった。音楽の断片をスケッチして積み重ねていく日々のなかで、神秘的な光景に出くわしたシベリウスは1915年4月21日の日記にこう綴っている。

「今日10時50分に16羽の白鳥を目にした。生涯で最も素晴らしい体験

のひとつだ! 主よ、なんと美しいことか! 長い間、私の頭上を旋回していた。輝く銀のリボンのように、太陽の霞の中に消えていった。[中略] 白鳥の鳴き声はトランペットのようでもあるが、明らかにサリュソフオーンの音色に近い。幼子の泣き声を思わせる低音の反復。自然神秘主義と人生の不安。[中略]こんなに長く部外者であった私に、このようなことが起こるとは」

日記に残された思い ▶ 「フィンランディア」の成功によって国民的作曲家となっていたシベリウスが「部外者」と自称しているのは、彼がスウェーデン系の血筋であり、スウェーデン語を母国語として育ったからだ。更に3日後には「白鳥は常に私の思いの中にあり、人生に輝きを与える。この世の何ものも — 芸術も文学も音楽も — 白鳥や鶴や雁(ガン)の鳴き声と存在ほど私の心を揺さぶらないとは奇妙なことだ」「私の交響曲は人生それぞれの時期における信仰告白である。ゆえに私の交響曲はすべてこれほどまでに異なるのだ」とも書き残している。これらの情報を総合すると交響曲第5番の根幹は、第一次世界大戦などによる人生の不安を、神の創りし自然に感動して乗り越える……といったところにあるのだろう。

50歳祝賀コンサートで初演 ▶ 1915年12月8日、シベリウスの50歳の誕生日を祝うコンサートで初演された時点では全4楽章だったが、翌年の改訂ではアタッカで切れ目なく繋がっていた第1楽章とスケルツォの第2楽章をひとつの楽章として再構成。1919年に再改訂を加えた版が最終稿となった。

曲の構成と音楽の特徴 ▶ 第1楽章 冒頭でホルンが奏でる短い第1主題が少しずつ変化しながら繰り返され、そこから自然に新しいメロディが生成されていく。初めて弦楽器が加わったあとに木管楽器が吹きはじめるのが第2主題だ。提示部の反復に相当する変奏のあと、展開部を経て視界がひらけるような再現部(ただし主調ではない)に辿り着くが、切れ目なく3拍子のスケルツォに移行。既出の旋律が変奏されていくと同時に、第2~3楽章の予兆となるような要素も現れる。

第2楽章 いわゆる緩徐楽章にあたる。弦楽器のピッツィカートとフルートが交互に奏するのがこの楽章の主題で、徐々に変奏されていく。

第3楽章 弦楽のトレモロによって走り続ける第1主題、振り子のように和音が連なっていく第2主題が交互にあらわれて変奏される。特にシベリウスが「白鳥の賛歌」と呼んでいたとされる第2主題は、孤独の深淵へと沈み込んだあとに空高く飛翔していく。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。